平成26年度 JACET中国・四国支部

春季研究大会プログラム

日時：6月7日（土）13:30－ 受付

場所：広島市立大学（広島市安佐南区大塚東三丁目４番１号）

国際学部棟　602教室・605教室

※当日は同棟４階で情報科学部の編入学試験が行われていますので、静かに入館をお願いします。

13:30－ 受付（国際学部棟６階ロビー（エレベータ前）

14:00－14:20 総会（602教室） 　　　　司会　 平本哲嗣（安田女子大学）

14:20－14:25　　　開会挨拶（602教室） 松岡博信（支部長・安田女子大学）

（休憩　5分）

14:30－17: 10　研究発表（602教室および605教室）

第１室（602教室） 司会　池野修（愛媛大学）

発表１：協同学習を取り入れた内容理解重視の授業－そのリメディアル教育としての可能性－

（14:30－15:00）　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　岩中貴裕（香川大学）

発表２：ティーチング・ポートフォリオの作成を通して英語教育活動を振り返る

（15:00－15:30） 中山晃（愛媛大学英語教育センター）

発表３：Introducing a new scale: Student Preferences for Instructional Language (SPIL)

（15:30－16:00） Eleanor Carson（広島市立大学）

（休憩：16:00－16:10)

発表４：小グループ内で実施するピア・アセスメント－その利点と問題点－

（16:10－16:40） 奥田利栄子（広島大学・広島修道大学　非常勤講師）

発表５：スイスにおける外国語教育政策－多言語教育，CLIL，外国語教員養成の視点より－

（16:40－17:10） 二五義博（海上保安大学校）

第２室（605教室）　　　　　　　 　　　　 司会　西田正（福山大学）

発表１：英語学習における嫌悪感と価値，困難度，防衛的反応の関係

（14:30－15:00） 藤居真路（広島県立尾道商業高等学校）

発表２：L1多義指導はL2誤出力予防につながるのか？—多義指導の有効性についての予備調査

（15:00－15:30） 西谷工平・小田希望（就実大学）

発表３：英語が苦手な学習者の内発的動機づけと学習への取り組みを高める授業の効果：実践研究による予備的検討

（15:30－16:00） 田中博晃（広島国際大学）

（休憩：16:00－16:10)

発表４：リスニングにおける文法性判断力

（16:10－16:40） 　 藤村美希（安田女子大学大学院）

発表５：Moodle小テスト機能の活用について

（16:40－17:10）　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　松岡博信（安田女子大学）

閉会挨拶（17：15－17：30） （602教室） 　　　 岩井千秋（副支部長・広島市立大学）

懇親会：「とり楽」（広島県広島市安佐南区大町東4-10-28）

時　間：18:00－20:00

会　費：3,100円（食べ放題・飲み放題）

◎ 研究発表　要旨

第１室（602教室）

発表１：協同学習を取り入れた内容理解重視の授業－そのリメディアル教育としての可能性－

発表者：岩中貴裕（香川大学）

　本研究は協同学習を取り入れた内容・言語指導（Content-Language Instruction，以下CLI）の可能性について考察することをその目的とする。その目的のために以下の２つの研究上の問いに答える。

　１．協同学習を取り入れたCLIは英語が苦手な学習者に好意的に受け入れられるか。

　２．協同学習を取り入れたCLIは英語が苦手な学習者の英語力の向上をもたらすか。

　内容と言語を同時に提示することによって知識の獲得と言語技能の習得を同時にもたらそうとする試みは，欧州や北米では既に多くの国で実践されておりその研究成果が蓄積されている。CLIは，授業内に言語使用の機会を提供し，形式よりも意味を重視することによって言語学習に望ましい影響を与え，目標言語に触れる量を大幅に増やす。

　本研究の調査参加者は発表者の担当する授業を受講した21名の学部生である。授業は週１回行われ，１回の授業時間は90分であった。授業は原則として英語で行った。世界の各国や地域を題材として扱っている教科書を使用し，授業を通して世界の様々な国や地域についての理解を深めることを目標とした。

　調査参加者が意味のやり取りのために英語を使用する機会を保障するために，毎回の授業にペアまたはグループでの活動を取り入れた。

　協同学習を取り入れたCLIは，英語に対して苦手意識を持っている学習者にも概ね好意的に受け入れられた。しかし英語力の向上についてはその効果を確認することができなかった。

発表２：ティーチング・ポートフォリオの作成を通して英語教育活動を振り返る

発表者：中山晃（愛媛大学英語教育センター）

　FD活動の一環として，「ティーチング・ポートフォリオ（教育業績記録），以下TP」を作成するワークショップがいくつかの大学や高専等で行われるようになってきた。TPとは，自らの教育理念や教育活動について振り返り再考することを目的とし，教育活動にかかわる書類等のエビデンスで裏付けされた記録のことであり，主に北米においては，教育内容を改善するツール，あるいは昇任・採用など人事評価に関わる資料として重要視されている（c.f. 栗田, 2012）。我が国においても，中教審の答申「学士課程教育の構築に向けて」（2008）において，大学に期待される取組の一つとして，積極的な導入が期待されているが，英語教育分野でのTPの導入事例や研究発表はほとんどなされていない。そこで本発表では，TPの目的や基本構造と，実際に作成したTPを紹介しながら，TP作成による英語教育上のメリットや反省点，今後の方向性などついて報告する。

発表３：Introducing a new scale: Student Preferences for Instructional Language (SPIL)

発表者：Eleanor Carson（広島市立大学）

Whether and when to use the students` first language (L1) in teaching English as a Foreign Language (EFL) has been controversial due to studies reporting results inconsistent with other studies. One reason for this inconsistency is the lack of a comprehensive and reliable research instrument. This presentation first aims to clarify methodological problems of related studies in the past， and then to describe the development and assessment of a new research instrument: the Student Preferences for Instructional Language scale (SPIL). This instrument measures students` preferences for teachers` use of the students` L1 in EFL classes in Japan. Data from a pilot study utilizing the initial 66-item questionnaire were assessed via a maximum likelihood factor analysis and seven underlying factor constructs were elicited. A follow-up study using the final 40-question SPIL scale confirmed high reliability among the extracted factors. Suggestions for appropriate use and limitations of this instrument will be discussed.

発表４：小グループ内で実施するピア・アセスメント－その利点と問題点－

発表者：奥田利栄子（広島大学・広島修道大学　非常勤講師）

　ピア・アセスメントは主に形成的な評価方法として多様な教科・科目で用いられている。スピーキングクラスで形成的評価を実施する場合，従来型の発表方法（学生が一人ずつクラス全員の前で発表する等）では実施に時間がかかり，評価を複数回行うのは難しくなる。そこで，クラスを小グループに分けグループ内でピア・アセスメントを実施すると，発表時間が短縮できるため複数回の評価が可能になる。先行研究では「スピーチに慣れる」「話しやすい」等の効用があることが報告されている（Brown & Diem， 2009)が，評価の信頼性を損なう問題（unfair marking)等を伴うことも指摘されている(例えばFalchikov, 2005)。本研究では，小グループ内で4回並びにクラス全員の前で1回，スピーチに対するピア・アセスメントを実施し，その後ライカート形式の問いと自由記述形式の問いから成るアンケート調査を行った。ピア・アセスメントを肯定的に捉える回答が否定的に考える回答より多かったものの，自由回答の約２割が不安や困難について言及するものであった。アンケート結果に基づき，小グループ内でのピア・アセスメント実施の利点と問題点について考察し，問題点については先行研究を参考にしながら，その対処方法について検討する。

発表５：スイスにおける外国語教育政策－多言語教育，CLIL，外国語教員養成の視点より－

発表者：二五義博（海上保安大学校）

　スイス連邦（通称スイス）は，言語・文化的には多様性にあふれる国で，ドイツ語，フランス語，イタリア語，レトロマン語の4つの言語を国語としている。その言語教育政策はカントン（アメリカの州より高い主権制を有する）によっても大きく異なり，地方分権主義に深く根差している。また，21世紀に入ってからは，外国語としての英語に対する教育熱も小学校などで高まってきており，カントンごとの従来の多言語教育は英語教育が新しく加わる形でより複雑化している。

　本発表の目的は，主に以下の２つの視点からの検討を行い，スイスの事例から日本の英語教育へ示唆できる点を探ることにある。第１に，スイスが多言語主義や地域主義へと至った歴史的経緯を踏まえつつ，スイスの学校言語教育の推移を見ていく。とりわけ，その現状については，連邦とカントンの協力の下に作成された全312ページの詳細な「スイス教育報告書」（Swiss Education Report, 2010）の資料を用いて検討する。この報告書からは，各カントンにおける英語教育政策（特に小学校）とそれへの反応や，CLIL的バイリンガル教育導入の実験結果などが明らかにされる。第２に，チューリヒ教員養成大学やその他の事例から，外国語教員の養成制度や教員研修の実態を見ていく。ここからは，スイスの教員養成体制の専門化やCLIL研修の導入などが明らかにされる。そして最後には，スイスとの比較で日本の英語教育が今後どうあるべきかの議論を深めたい。

第２室（605教室）

発表１：英語学習における嫌悪感と価値，困難度，防衛的反応の関係

発表者：藤居真路（広島県立尾道商業高等学校）

　英語教育において，学習者の学習態度を改善しようとする場合注意したりする指導を行うだけではなく，英語学習への興味や価値等を高める指導を行うことが多い。しかし，提出物の遅れの指導では，英語学習への興味や価値教育から切り離し，罰課題や単位不認定の可能性を示唆した指導を行ったりすることが多い。

　課題等の提出の遅れは遅延と呼ばれ，セルフ・ハンディキャッピングの１つとして見做されてきた。セルフ・ハンディキャッピングは防衛的悲観主義とともに不安への対応方法と考えられ，防衛的反応の１つとして見做されている。Fujii（2012）は，英語学習における学習不安と防衛的反応の関係について研究し，遅延といった問題に対して不安を用いて指導する方法を提案している。しかし，英語学習における防衛的反応と自己認知（学習価値や嫌悪感，困難度）との関係について十分に検討がなされてこなかった。具体的に言えば，英語学習への嫌悪感が低いと防衛的反応が少ないのか，英語学習への困難度が低いと防衛的反応が少ないのか，英語学習への学習価値が高いと防衛的反応が少ないのか，と言った問題については検討されてこなかった。

　そこで，本研究では，高校１年生を対象とし，英語学習の自己認知（学習価値や嫌悪感，困難度）と防衛的反応の関係について質問紙法を用いて調べた結果を発表する。

Fuji, S. (2012). The relationship between two temporal dimension anxieties and defensive strategies in second language learning. *ARELE*, 23, 89-104.

発表２：L1多義指導はL2誤出力予防につながるのか？—多義指導の有効性についての予備調査

発表者：西谷工平・小田希望（就実大学）

　本研究の目的は，L1語の多義性を学習者に指導することで，L2語の誤出力をどの程度まで抑制することが可能なのかを検証することにある。小田ら（2014）は学生が自由記述した英語を収集・分析し，その中で数多く確認された助動詞can（could）の誤出力が，日本語「できる（できた）」の多義性に対する認識不足に起因する可能性を指摘した。この問題に対処するためには，今井ら（2012）が指摘するように，L1とL2の相違点を学習者に意識させる必要がある。その試みのひとつとして，本研究では日本語「できる」の多義性を学習者に指導することで，学習者の「できる」の英語訳にどのような変化が生じるのかを検証した。検証は次のプロセスで実施した。まず，小田ら（2014）のデータを基に作成した「できる」を含む日本語文を英語訳する課題を学習者に実施した。次に，同学習者を英語力が均等になるように2つのグループに分割し，「できる」の多義性について，一方のグループにはプライミングを行い，もう一方のグループにはプライミングを行わない状態で，上述の英語訳課題（日本語文を一部変更）を実施した。これらを通して，「できる（できた）」の多義性に対する認識不足が助動詞can（could）の誤出力につながっているのか，そして多義指導が当該誤出力を予防する手立てになり得るのかを検証した。本発表では，その検証結果を報告する。

発表３：英語が苦手な学習者の内発的動機づけと学習への取り組みを高める授業の効果：実践研究による予備的検討

発表者：田中博晃（広島国際大学）

　本論では日本人大学一年生の内，英語が苦手な学習者を対象に自己決定理論を用いた動機づけを高める授業実践を行い，その効果の検討を行った。より具体的には，自己決定理論の3欲求の中でも，本論では有能性の欲求と関係性の欲求を満たすことに焦点あてた授業実践を行い，内発的動機づけと授業への取り組みへの効果を予備的に検討した。調査の対象となったのは，工学系の学部に所属する学習者54名で，英語の習熟度が特に低い学習者26名を選別し，データ分析の対象とした。その結果，調査協力者の3欲求，特性レベルの内発的動機づけ，英語授業レベルの内発的動機づけ，英語授業への取り組みの上昇が見られた。

発表４：リスニングにおける文法性判断力

発表者：藤村美希（安田女子大学大学院）

　英語学習者の持つとされる文法的知識は，リスニングテストにおいて，参照されているのか，あるいは参照されていないのだろうか。

　そこで，リスニングテストにおける英文の正誤判断場面では，英語学習者自身が持つ顕在的・潜在的な知識が，どの程度，正誤判断に関わるのかを明らかにしていきたいと考える。

　さらに，CELTの結果とリスニングテストの結果を比較し，文法判断力があればリスニングの結果も良いのかを検討する。

発表５：Moodle小テスト機能の活用について

発表者：松岡博信（安田女子大学）

　Moodleには，様々な小テストを作成し，かつそれらを有効に活用できる各種のオプション機能が用意されている。もしMoodleを使用していながら，これらの小テスト作成機能を駆使していないならば，全く宝の持ちぐされであると言っても過言ではない。それほどに実に多彩で有効な機能である。

　本発表では，約10年に渡るMoodleの設置および管理の経験を交え，Moodle活用による授業実践の中で，特に小テスト機能による各種問題の作成，実施，成績管理などの方法や付随するTipsを具体的に提示，解説する。そして，今後の更なる有効活用を目指すための方策や課題を提示し，かつ効率的なBlended Learningの実現と開発に向けたMoodleおよび小テスト機能活用の具体案を示したい。